

読売日本交響楽団 第10代常任指揮者就任

第10代常任指揮者

**セバスティアン・
ヴァイグレ**

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor



ご来場の皆様

まず初めに、読売日本交響楽団という素晴らしい楽団の第10代常任指揮者として指揮台に立てること、そして皆様が、オーケストラの音楽に興味をもってくださること、さらに、特別なコンサート体験に好奇心を抱いてくださることに対して、感謝申し上げます。

あらためまして、新しいシーズンへようこそ！ 今シーズン、私が指揮するコンサートでは、ドイツ・ロマン派の作品を中心に上げます。ブラームスの交響曲第1番と最後の交響曲である第4番を取り上げることで、この偉大な作曲家の生涯における全交響曲の業績を俯瞰^{ふかん}します。マーラーの交響曲第5番は、初演当時は理解されなかったものの、今日では彼の交響曲のなかで最もよく演奏されている作品です。私たちは大きく広がる音響体験を味わうことでしょう。さらに、ベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉とリヒャルト・シュトラウスの交響詩〈英雄の生涯〉で、それぞれの時代の「英雄性」に光を当てます。

ソリストを迎える作品では、モーツァルトとベートーヴェンのピアノ協奏曲、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲、シューマンのチェロ協奏曲などを演奏しますが、とりわけオーストリアのチェリスト、ユリア・ハーゲンさんと日本人ピアニスト、岡田奏^{かな}さんという若い二人との初共演を楽しみにしています。もちろん、アラベラ・美歩・シュタインバッハーさんやルドルフ・ブッフビンダーさんら、素晴らしいソリストと日本で再会することも大変楽しみです。

そして今後のプログラムでも、このように、古典派やロマン派の交響曲を華麗な協奏曲と組み合わせつつ、もちろんエキサイティングな現代作品や新作も織り交ぜていきたいと思っています。

皆様、私は東京を始めとする日本で過ごす時間、そしてコンサートにご来場くださるお客様と過ごす時間を楽しみにしています。

本日のプログラムをどうぞお楽しみください。そして、ぜひ今後も定期的に私たちのコンサートへお越しください。

Message

セバスティアン・ヴァイグレ 

ご挨拶

——ヴァイグレ氏就任にあたって

読売日本交響楽団の第10代常任指揮者に、ドイツの本格派セバスティアン・ヴァイグレ氏をお迎えできたことは、私ども読売グループにとってこのうえない喜びです。

ヴァイグレ氏は、10年以上にわたってフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めるなど、世界の第一線で活躍する指揮者です。とりわけ高い評価を得ているドイツ・ロマン派音楽を中心にしつつ、新たな挑戦にも期待が高まります。また、「オーケストラ・ビルダー」として、読響の演奏水準をさらに引き上げることと信じています。

名匠が紡ぎだす音楽が、クラシックを愛する皆さまの心を魅了すると、確信いたしております。マエストロとともに新たな時代を切り開く読響に、これまで以上のご声援を賜りますようお願い申し上げます。

「運命的なものを感じる」。マエストロ・ヴァイグレは、読響の歴史の節目となる第10代の常任指揮者の座に就く感慨を、こう語ってくれました。思えば、冷戦時代の旧東ドイツに生まれた音楽少年が、長じて国際的名声を博する指揮者となり、1989年のベルリンの壁崩壊から30年という節目に読響の常任に就任することも、やはり歴史的な感慨を抱かせずにはおきません。いま、読響の歴史の新たな章“ヴァイグレ時代”が始まろうとしています。

ワーグナー、ブラームス、R. シュトラウスなどドイツ・ロマン派の音楽を柱に幅広いレパートリーを備え、オペラとシンフォニーの両方で活躍する名匠の下で、近年進境著しい読響の音楽が、さらに輝きと深みを増すことを期待します。胸の高鳴りをファンの皆さまと共有しつつ、今後の読響への熱いご支援を心よりお願い申し上げます。



白石興二郎

読売新聞グループ本社
代表取締役会長

KOJIRO SHIRAIISHI



古本 朗

読売日本交響楽団
理事長

AKIRA KOMOTO

祝 辞



宮田亮平

文化庁長官

RYOHEI MIYATA

セバスティアン・ヴァイグレ氏の第10代常任指揮者就任を心よりお慶び申し上げます。

文化芸術の振興は、人々の心豊かで活力あふれる生活に欠かせない存在であり、持続的な社会の発展や国際平和の礎となるものです。読売日本交響楽団は創立以来、世界的な指揮者・ソリストと共演を重ね、実績を積んでこられました。このたび、欧州の一流歌劇場を中心に世界で活躍するドイツ人指揮者ヴァイグレ氏を迎え、我が国を代表するオーケストラとして、日本国内はもちろん、世界に向けて質の高い音楽を発信し、多くの皆様に魅了していただくことを期待しております。

ヴァイグレ氏の就任が、読売日本交響楽団のさらなる発展と、我が国の文化芸術のより一層の振興と発展に寄与していくことを祈念しています。

5/14 Tue.

第588回 定期演奏会《第10代常任指揮者就任披露
演奏会》 サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.588 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

ヘンツェ
HENZE

[休憩]
[Intermission]

ブルックナー
BRUCKNER

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.9
SEBASTIAN WEIGLE
長原 幸太
KOTA NAGAHARA

7つのボレロ [約22分] -p.11
Sieben Boleros
I. 癪 癪もちの女 II. 賛歌 III. 期待 IV. 王のクジャク
V. 高慢 VI. 痛み VII. アラビアの王女の雄大なダンス・ステップ

交響曲 第9番
ニ短調 WAB 109 (ノヴァーク版) [約63分] -p.13
Symphony No. 9 in D minor, WAB 109 (Nowak edition)
I. Feierlich, misterioso
II. Scherzo
III. Adagio

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

5/18 Sat.

第217回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.217 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

5/19 Sun.

第217回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.217 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ロルトツィング
LORTZING

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.9
SEBASTIAN WEIGLE
岡田 奏 -p.10
KANA OKADA
長原 幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇《ロシア皇帝と船大工》序曲 [約7分] -p.15
“Zar und Zimmermann” Overture

ピアノ協奏曲 第21番 八長調 K. 467 [約29分] -p.16
Piano Concerto No. 21 in C major, K. 467
I. Allegro maestoso
II. Andante
III. Allegro vivace assai

交響曲 第4番 ホ短調 作品98 [約39分] -p.17
Symphony No. 4 in E minor, op. 98
I. Allegro non troppo
II. Andante moderato
III. Allegro giocoso
IV. Allegro energico e passionato

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

5/24 Fri.

第622回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.622 / Suntory Hall 19:00

5/26 Sun.

第111回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No.111 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Principal Conductor
チェロ
Cello
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ワーグナー

WAGNER

シューマン

SCHUMANN

[休憩]

[Intermission]

ベートーヴェン

BEETHOVEN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.9

SEBASTIAN WEIGLE

ユリア・ハーゲン -p.10

JULIA HAGEN

日下紗矢子

SAYAKO KUSAKA

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉

第1幕への前奏曲 [約9分] -p.19

“Die Meistersinger von Nürnberg” Prelude to Act I

チェロ協奏曲 イ短調 作品129 [約25分] -p.20

Cello Concerto in A minor, op. 129

I. Nicht zu schnell

II. Langsam

III. Sehr lebhaft

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉 [約47分] -p.21

Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 “Eroica”

I. Allegro con brio

II. Marcia funebre : Adagio assai

III. Scherzo : Allegro vivace

IV. Finale : Allegro molto

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

ヴァイグレ×読響

新時代の幕開け!



©読響

今年4月、読響第10代常任指揮者に就任したドイツを代表する名匠が登場。オペラとコンサートの双方で活躍目覚ましい本格派が、得意のドイツ・オーストリア音楽を中心に三つのプログラムで新たな読響サウンドを披露する。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げ、評判を呼んだ。07年にはワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉でバイロイト音楽祭にデビュー。11年まで指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年と18年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭、ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などを指揮し、国際的に活躍している。

読響には16年8月に初登場して三つのプログラムを指揮し、好評を博した。17年7月には、東京二期会のR. シュトラウス〈ばらの騎士〉で共演、19年6月には同じく〈サロメ〉で共演予定。

5/14
定期

5/18
土曜マチネー

5/19
日曜マチネー

5/24
名曲

5/26
みなとみらい

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：横浜みなとみらいホール(5/26)

※5月24日公演ではNHKによるテレビ収録が行われます。

5/18

土曜マチネー

5/19

日曜マチネー



©Kazashito Nakamura

ピアノ

岡田 奏

KANA OKADA, Piano

瑞々しい感性と多彩な表現力で聴衆を魅了する新星ピアニスト。函館市生まれ。8歳でリサイタル・デビュー。15歳で渡仏し、パリ国立高等音楽院の修士課程を最優秀で修了。アーティスト・ディプロマ科を経て、欧州をはじめ国際的に活動している。2013年にプーランク国際コンクールと仏ポントワーズのピアノ・キャンパス国際コンクールで優勝。16年エリザベート王妃国際音楽コンクールのファイナリスト。小林研一郎、尾高忠明、広上淳一、オルソップ、バーメルトらの指揮でベルギー国立管、シモン・ポリバル響、東響、京響、札響などと共演している。サントンジュ音楽祭、ラ・フォル・ジュルネTOKYO、パリのショパン・フェスティバル、アヌシー音楽祭などに出演。18年、デビューCDをリリースし、好評を得ている。今回、読響に初登場。

5/24

名曲

5/26

みなとみらい

チェロの名手クレメンスを父に持つ、ザルツブルクが生んだ新星チェリストが読響に初登場。1995年生まれ。5歳からチェロを始め、ザルツブルク・モーツアルテウム音楽院とベルリン芸術大学で学び、ブロンツィ、シフ、マインツらに師事。2018年プラハの春国際コンクール第3位をはじめ、リーツェン国際コンクールやトリノ・マツァクラーティ国際コンクール優勝など数々の賞を受賞。クロンベルク・アカデミーに招待されたほか、ウィーン・フィルの室内楽プロジェクトに参加した。ソリストとして、ボルトン指揮モーツアルテウム管やマクリーシュ指揮ウィーン室内管などと共演。室内楽ではヴラダーやシルマー、ルーカス・ハーゲンらと共演し、ボン・ベートーヴェン音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭に出演している。



©NedaNavaee

チェロ

ユリア・ハーゲン

JULIA HAGEN, Cello

ヘンツェ

7つのボレロ

戦後のドイツを代表する作曲家ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ(1926～2012)は、ヴォルフガング・フォルトナーやルネ・レイボヴィッツに学んだ。若くしてヘッセン州立ヴィースバーデン劇場の芸術監督兼指揮者に抜擢され、〈孤独通り〉(1951)でオペラ作曲家としても成功を収めたが、53年には西ドイツの政治体制やセリー(音列主義)一色となった現代音楽の方向性に疑問を抱きイタリアに移住。さらに60年代後半にはマルクス主義思想に共鳴、作品にも政治的な主張が盛り込まれただけでなく、キューバで教育活動にも携わるなど、前衛運動における主知主義的な流れとは一線を画す独自の深まりを見せた。

豊かなオーケストレーションに彩られた躍動感あふれる作風は、演劇的描写性や身体性と相性がよいのか、オペラやバレエも精力的に書き、〈ホンブルクの王子〉(1958/59)、〈若い恋人たちのエレジー〉(1959～61)、〈英国猫〉(1980～83)など再演を重ねている作品も多い。三島由紀夫の『午後の曳航』^{えいこう}をオペラ化した〈裏切りの海〉(1986～89)の日本語版(改訂時に原題に戻された)は、2003年に読売日本交響楽団が当時の常任指揮者ゲルト・アルブレヒトと初演して話題を呼んだ。

〈7つのボレロ〉は、グラン・カナリア音楽祭(スペイン・カナリア諸島)の委嘱により1998年に作曲され、読響がやはりアルブレヒトの指揮で初演している。舞台作品の管弦楽への編曲はヘンツェにも珍しくはないが、この作品も1993年から95年にかけて作曲されたオペラ〈ヴィーナスとアドニス〉を下敷きにしている。美神ヴィーナス、美少年アドニス、そして軍神マルスの三角関係がダンサーによって踊られ、それがプリマ・ドンナ、若いオペラ歌手、英雄を演じる役者の関係とパラレルに進んでいく。

オペラはシンフォニアで始まり、マドリガル、レチタティーヴォ、ボレロなどの小曲を重ねている。〈7つのボレロ〉はそこからボレロを抜き出して編んだもので、全体を通じてボレロのリズムが聞こえてくるが、楽曲はそれぞれ色彩感豊かに描き分けられている。大量の音を書き込みつつもはっきりと濃淡をつけ、オーケストラを効果的に鳴らすあたりに、巨匠の健筆ぶり、円熟ぶりが表れている。

5/14

定期

〈ラ・ヴァルス〉などで美しいウィンナ・ワルツを書いたバスク人ラヴェルらを例に、ヘンツェはこれらのボレロが「何かを引用したのではなく、自分の筆から流れ出たもの」で、自身の目と耳がとらえたスペイン音楽、自身が「スペイン的なものとしてイメージしているもの」の表現と述べている。オペラの筋からも声からも解放され、純粋な器楽作品として「私たち外国人がわずかしかならないからこそいつまでも夢見てしまう、あの遠い、驚くほど美しい国へのあいさつ」となったのである。

各楽章のタイトルと概要は以下の通り。Ⅰ. 癩癩^{かんしゃく}もちの女：ティンパニの鳴動に乗って弦がラテンの情熱を歌い、アルトサクソフォンの官能的な旋律が続く。Ⅱ. 賛歌：カスタンネットが主導し軽快に始まるが、すぐに様々な音が絡み合い、オーケストラのあちこちからボレロのリズムが間欠的に湧き上がる。Ⅲ. 期待：ヴァイオリンに現れる3拍子の優美な旋律が、2拍子の律動に中断される。Ⅳ. 王のクジャク^{けんらん}：リズムが鋭く立ち、行進曲調になる。豪華絢爛としたオーケストレーションが、「王のクジャク」の華麗さと威厳を伝える。Ⅴ. 高慢^{へんぼう}：オーケストラは周期的なパルスに律せられたかと思えば、流動する音響体へと変貌を遂げる。後半部では弦の鋭い刻みの上で木管楽器が悲鳴を上げる。Ⅵ. 痛み：16分音符で忙しく動き回るスケルツォ風の楽章。Ⅶ. アラビアの王女の雄大なダンス・ステップ：祭りのようなにぎやかさの合間に、打楽器群が鮮やかな協奏をみせる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1998年／初演：2000年2月2日、ラス・パルマス・デ・グラン・カナリア／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート3（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、バストランペット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、カスタンネット、クロティル、木魚、チャイニーズゴング、スチールドラム、ムチ、ウッドブロック、トムトム、ヴィブラフォン、マリimba、銅鑼）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

ブルックナー

交響曲 第9番 二短調 WAB 109（ノヴァーク版）

アントン・ブルックナー（1824～96）は、典型的な大器晩成型芸術家だ。リンツ近郊の学校教師のもとに生まれたが早くに父を亡くし、ザンクト・フローリアン修道院の聖歌隊に預けられた。教員を務めた後、31歳でリンツの大聖堂のオルガニストとなり、オルガンの実力が買われて“音楽の都”ウィーンに進出したのは44歳の時。交響曲作曲家としての本格的なキャリアはそれから始まるのである。

ブルックナーはベートーヴェンが交響曲第9番を作曲した年に生まれているが、交響曲というジャンルは、ブルックナーが得意としたもう一つのジャンル、宗教音楽と並び、ロマン派の作曲家にはあまり重視されず、19世紀半ばにはかつての勢いを失い停滞期に入っていた。ブルックナーは遅咲きだったからこそ、交響曲再興の機運とシンクロしたのかもしれない。その最後の曲となった交響曲第9番は「愛する神」に捧げられ、死を前にした宗教観を色濃く反映している。

1887年、交響曲第8番を完成させたブルックナーは同年9月21日に第9番の構想に取りかかっているが、第3番、第4番、そして書き下ろしたばかりの第8番の改訂に時間を取られてなかなか進捗せず、89年4月にはスケルツォに取りかかったものの、またもや第1番の改訂に入ってしまう、第1楽章の総譜に手をつけるのはようやく91年4月になってからだった。92年、望んでいた第8番の初演がない、第9番に集中する環境が整うが、この頃になると体調不良や体力の衰えを自覚するようになり、作曲は残された時間との闘いとなった。同年10月14日に第1楽章、翌93年2月27日にはスケルツォ楽章、さらに94年10月末にはアダージョ楽章が完成し、いよいよフィナーレを残すのみとなる。

ブルックナーはウィーンでは評論家ハンスリックらの敵対的な言説に悩まされていたが、この頃になると交響曲作曲家としての名声も揺るぎないものとなっていた。住居の階段の上り下りも難儀に感じるようになったブルックナーに、皇帝フランツ・ヨーゼフが95年、ベルヴェデーレ宮の敷地内に一室を提供し、そこで最後の格闘が進められた。熟慮を重ねたこの楽章に、ブルックナーは死の当日も取り組んでいたという。おそらく全体像は頭の中に出来上がっていたに違いない。しかし、再現部を書き上げたあたりで力尽き、96年10月11日に世を去った。

第1楽章 荘重に、神秘的に 弦のトレモロが生みだす“原始霧”の中から、ホルンが禍々しく顔を出す典型的なブルックナー開始。次第に勢いを増し、第1主題が全楽器の総奏で力強く歌われる。その後、勢いを減じ総休止にたどりつくと、第2ヴァイオリンの動きに乗って、第1ヴァイオリンに柔和な第2主題が現れる。これが反復され音高が上がっていった先で、オーボエをはじめとする木管群とホルンが第3主題を提示する。

第2楽章 スケルツォ 軽く快活に 第1ヴァイオリンのピッツィカートの間いかけに、ヴィオラ、チェロが反行形で応答し、金管が引きずるような重く厳しいパルス^{たた}を刻む。トリオは速度を速め、軽やかな気分で駆け抜ける箇所と、哀愁を湛えた旋律がロンドを織りなしていく。

第3楽章 アダージョ 遅く荘重に 冒頭のヴァイオリンの緊張感をはらんだ跳躍が高みへと解き放たれると、トランペットとホルンが呼び交わしながら歓喜を爆発させ法悦の境地が出現する。第2主題はヴァイオリンが歌う彫りの深い旋律で、これは伴奏音型を複雑化させながら繰り返される。第1主題が激しく提示されるうちに終末への予感^たは強まり、コーダではヴァイオリンが細やかに動く中、ホルンが天国とはさにあらんと思わせる陶然とした和音をたなびかせる。

ブルックナーは、フィナーレの代わりに〈テ・デウム〉を演奏してもよい、と述べたようだし、フィナーレ楽章復元の試みもなされている。しかし、それらの上演形態がさほど広まらないのは、不思議な解放感と明るさを帯びたアダージョの結尾が、“白鳥の歌”にふさわしい魂の浄化を感じさせるからではなからうか。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1887～96年10月／初演：1903年2月11日、ウィーン／演奏時間：約63分
楽器編成／フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8（ワーグナーチューバ持替）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ロルツィング 歌劇〈ロシア皇帝と船大工〉序曲

アルベルト・ロルツィング（1801～51）は19世紀の初めにベルリンで産声を上げた。家業は皮革商だった。両親とも芝居好き。やがて商売をたたみ、一家で役者の道に入る。ロルツィングはその“芸”のすべてを劇場で学んだ。大人たちの芝居を見て学び、子役として舞台上がった。弦楽器のレッスンを受け、劇団のオーケストラで演奏もした。音楽理論書で独学し、劇音楽の作曲を手がけた。各地の劇場・劇団を渡り歩きながら、ロルツィングはそんな生活を重ねていく。1817年からはABC劇団に所属し、俳優として、また音楽家として活躍した。

転機となったのは、ABC劇団とともにライブツィヒを訪問したこと。座長に勧められて35年、喜歌劇〈二つの隠れ家〉を作曲した。翌々年の初演ではみずから主役も演じ、音楽ともども話題を呼ぶ。評判は各地に広まり、ベルリンやミュンヘンで成功を収めた。その余勢を駆ってロルツィングは、喜歌劇〈ロシア皇帝と船大工〉を書き上げた。それがベルリンで前作以上に大成功し、作曲家としての代表作となった。

内容はロシア皇帝ピョートル1世の故事にちなむ。17世紀末のオランダ・ザールダム。この港町には、ペーター（＝ピョートル）という名の船大工が二人いた。ひとは身分を隠して造船技術を学ぶ皇帝、もうひとはロシア軍からの脱走兵だ。あるときモスクワから反乱の知らせが届く。皇帝は故国に帰ることを決めるが、オランダ当局がそれを妨害する。周囲は脱走兵のペーターを皇帝だと勘違いする。その思い込みを利用して皇帝は、オランダを脱出しモスクワへと発つ。

序曲は、波に揺れる船を思わせる3拍子の序奏から始まる。やがてドローン（持続音）が鳴り響き、ロシア風の行進曲が続く。4拍子にギアチェンジして滑らかなメロディーが登場。その後、行進曲と滑らかなメロディーとが交互に現れる。最後に加速して一気呵成に曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1837年以前／初演：1837年12月22日、ライブツィヒ／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル、太鼓）、弦五部

5/18

土曜マチネー

5/19

日曜マチネー

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第21番 八長調 K.467

キリスト教国が大半のヨーロッパでは、オペラの上演も教会暦の影響を受ける。18世紀、オペラの上演は待降節と四旬節の年に2度、中断するのが常だった。待降節はキリストの誕生を心静かに待つ期間。クリスマス直前の数日は、オペラのように卑近な内容の歌芝居は禁止された。また、復活を祝うイースターの前には、身を清める期間・四旬節が置かれる。この間は肉食同様、オペラも忌避の対象となる。

オペラが閉め出されるこの時期、その代わりを務めるのが器楽曲だ。なかでも管弦楽曲は、劇場がオペラを上演しない時期に、その劇場の楽団を利用して演奏される「オペラの代用品」だった。18世紀末のウィーンで、こうした演奏会の花形といえばピアノ協奏曲である。自作自演の名人芸は、音楽に飢えた聴衆に熱烈に迎えられた。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、当時「クラヴィア協奏曲の作曲家・弾き手」として人気を博していた。

モーツァルトは1785年3月、ピアノ協奏曲第21番八長調を作曲した。ちょうどひと月前、同第20番二短調も書いている。いずれも自分の主催する四旬節演奏会のために、みずから独奏ピアノを弾いた。

第1楽章冒頭、ぼつぼつと分散された和音と、滑り落ちるような音階との組み合わせが耳を引く。この二つの要素が楽章のさまざまな場面にこれでもかと登場する。ときには、ピアノを含む各パートが絡み合いながら、これらの要素を次々と示していく場面もある。**第2楽章**の初めの旋律も、その造りは第1楽章冒頭とよく似ている。分散した和音と滑らかな音階との組み合わせだ。途中、かげりのある部分を挟んだのち、少し高い音域で冒頭の旋律を振り返る。**第3楽章**は、半音階で上行する音形と、全音階気味に下行する音形との組み合わせが楽しい。このひとひねり加えた音の上がり下がりが、楽章に諧謔的な味付けをし、推進力を保つ役割もしている。管弦楽の間を縫うように疾走するピアノも、軽快さでは負けていない。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1785年3月9日／初演：1785年3月10日、ウィーン／演奏時間：約29分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ブラームス

交響曲 第4番 ホ短調 作品98

ヨハネス・ブラームス（1833～97）は1876年からの10年間で、4曲の交響曲を書き上げた。それまでの寡作ぶりが嘘のようだ。第1番の初演は1876年、ドイツ西部のカールスルーエ。その後、マンハイム、ミュンヘン、ウィーン、ライプツィヒ、ブレスラウで演奏された。この時期、ドイツにはブラームスを受け入れる素地があった。71年、第二帝国によりドイツ統一。68年にブラームスを書いた〈ドイツ・レクイエム〉は帝国成立後、ドイツの各地で上演され熱狂的に歓迎された。それによりブラームスは国民的作曲家の名手を手にする。ドイツの人々は彼の交響曲を待ち望んでいた。作曲家はそんな空気に呼応した。

ブラームスは84年と85年の夏、ウィーンの南にある保養地ミュルツツシューラクで交響曲第4番を書いた。それまで通い慣れたバート・イシュルやヴィースバーデンのような温泉場と違い、ミュルツツシューラクは山間の静かな土地。ブラームスはそこで、最初の年に前半二つ、次の年に後半二つの楽章をそれぞれ完成させる。この第4番の初演もまた、ドイツ帝国の中央に位置するマイニンゲンで85年に行われた。ブラームスの理解者であった指揮者ハンス・フォン・ビューローが、同地の宮廷楽団を率いていたおかげで、作曲家はマイニンゲン大公の知遇を得ることができた。

この交響曲は、外形の点ではハイドン、ベートーヴェン以来の型を守るが、その内実は従来の枠を大きく外れる。純理論的に作られた旋律、教会旋法、そしてバッハの主題に基づく変奏曲。ブラームスにとっては音楽的必然でも、受け取る側にしてみれば、そこに「教会旋法からバッハとベートーヴェンを経由してブラームスにいたる」ドイツ音楽の歴史を感じずにはいられない。

ブラームスは第1楽章と第4楽章とで、変奏曲と従来の型（ソナタ形式）とを融合させている。ただし、その方法は両楽章で違う。全体は、その異なる二つの“変奏曲＝ソナタ形式”楽章で、どこか古風な響きのアンダンテ楽章と、おどけた調子のジョコソ楽章とを挟み込む構成をとる。

第1楽章冒頭、物憂げで情感あふれる旋律が印象的だが、その造りは体系的だ。口・ト・ホ・ハ・イ・嬰ヘ・嬰ニ・口と3度音程で規則的に並ぶ音の内、二つずつを

5/18

土曜マチネー

5/19

日曜マチネー

5/18

土曜マチネー

5/19

日曜マチネー

組みにして（ロート、ホーハ、イー嬰へ、嬰ニーロ）、そのユニットを交互に下行・上行させて並べると、くだんのメロディーが生まれる。このメロディーを変奏曲の要領で変化させていく。それをハイドン以来の交響曲の型（ソナタ形式）の中に流し込むことで、この個性的な音楽ができて上がる。

第2楽章の最初の旋律は、聖歌の音階の一つフリギア旋法（ミファソラシドレミ）に依っている。決然としているようで、どこか角の取れた感触があるのはその効果。このメロディーを変化させたり、別のメロディーを登場させたりしつつ、最後にこのフリギア旋法のテーマを回帰させて楽章を閉じる。

「ジョコーソ（ふざけた調子で、快活に）」と指示のある**第3楽章**。生氣あふれる楽想はもちろんだが、トライアングルが活躍する点にも、この発想記号の意味するところが表れ出ている。

ブラームスはバッハのカンタータから旋律を借り受け、それを**第4楽章**の主題とした。原曲は〈主よ、われ汝をあおぎ望む〉BWV150の終曲の合唱。ブラームスは指揮のレパートリーにバッハ作品をいくつか入れていて、BWV150もその一つだった。この楽章ではバッハの主題をもとに30の変奏を積み重ね、さらに結尾部を加える。30の変奏を4分割し、それぞれの部分に展開や再現の役割を与えることで作曲家は、変奏曲にソナタ形式の原理を埋め込んだ。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1884～85年／初演：1885年10月25日、マイニンゲン／演奏時間：約39分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部

ワーグナー

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉第1幕への前奏曲

ドイツ・ロマン派オペラの巨匠リヒャルト・ワーグナー（1813～83）の代表的な管弦楽曲の一つ。楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉（全3幕）自体は、1862～67年に作曲され、68年ミュンヘンで初演された。これは、初演順でみると〈トリスタンとイゾルデ〉と〈ニーベルングの指環〉4部作の間にあたる。ただしこの前奏曲は、62年に作曲され、同年ライプツィヒにて先行初演されている。

「マイスタージンガー」とは、中世ドイツにおける、「歌手＝ジンガー」の能力を備えた「職人の親方＝マイスター」のこと。当時の親方への昇格には、専門技術のみならず、歌の自作及び歌唱能力が求められたことが物語の基盤になっている。ワーグナー自身の台本による本編は、実在した靴屋の親方ザックスが、金細工師の親方の娘エファに恋する騎士ヴァルターを助け、歌合戦に勝たせてエファを獲得させる……といった物語。〈さまよえるオランダ人〉以降のワーグナーの傑作群の中で唯一の喜劇的要素をもった作品であると同時に、ドイツ精神の賛美が高らかに謳い上げられた作品でもある。

第1幕への前奏曲は、劇中の動機を多数用いて構成された、壮麗で祝典的な音楽。ワーグナーの前奏曲には珍しく、ロマン派歌劇の序曲と同様の性格を有していることもあって、単独で演奏される機会が非常に多い。曲は、全合奏によるハ長調の「マイスタージンガーの動機」で堂々と開始。次いでフルートによる柔和な「愛の情景の動機」と、明るい「行進の動機」が奏される。さらに複数の動機が現れた後、ともにヴァイオリンで出されるホ長調の「愛の動機」と「情熱の動機」に基づくならかな部分に移る。やがて木管楽器の歯切れ良い動きで「マイスタージンガーの動機」が再登場。数々の動機が交錯しながら高揚し、「行進の動機」を中心とした華やかな終盤を迎える。全体に対位的な動きや重層感が際立っており、中盤過ぎで三つの動機が同時進行する場面は、特に聴きどころとなる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1862年／初演：1862年11月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約9分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、ハープ、弦五部

5/24

名曲

5/26

みなとみらい

5/24
名曲5/26
みなとみらい

シューマン

チェロ協奏曲 イ短調 作品129

ドイツ・ロマン派の牽引者^{けんいん}ロベルト・シューマン（1810～56）が晩年近い時期に残した名作の一つ。古今のチェロ協奏曲の中でも、ドヴォルザークやハイドンの諸作と並ぶ重要レパートリーとなっている。

1850年9月、シューマンはデュッセルドルフ市の音楽監督に就任し、ドレスデンから当地に移った。本作はその地で作曲された最初の大作。同年10月10日に着手され、11月1日に完成された。これは新たな創作意欲^{あふ}が溢れていた時期であり、12月には交響曲第3番〈ライン〉も作曲されている。「チェロ協奏曲のジャンルに名作が少ないと感じたこと」が創作の動機とみられているが、独奏パートの難度の高さと相まって、生前に初演の機会は訪れなかった。チェロ奏者ボックミュールの助言を取り入れて、54年8月に出版されたものの、公的な初演は没後4年を経た60年のこと。しかもピアノ伴奏で行われた。なおシューマンは、この後精神状態が悪化し、54年ライン川に身を投げるが一命を取り止めることになる。

曲は、シューマン自身「徹底して快活な作品」、妻クララも「ロマン性、躍動感、清新さ、フモール（ユーモア）がある」と述べるなど、彼としては比較的ポジティブな音楽だ。しかし、「快活」な中にも憂愁のロマンが横溢^{おういつ}している。独奏チェロは休みが少なく、高度な技術を要しながらも、名人芸的な華麗さを際立たせず、管弦楽と調和するように書かれている。また、5年前に初演されたメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲と同様、全3楽章が切れ目なしに続く形で、雰囲気^{おんき}の持続が図られている。

第1楽章 速すぎず。最初に独奏チェロで提示される哀感漂う主題を中心にした流麗な音楽。

第2楽章 ゆっくりと。へ長調。独奏チェロが息の長いフレーズを歌う、穏やかな間奏曲風の音楽で、中間の重音部分が印象的。

第3楽章 きわめて生き生きと。第1楽章の主題と関連した躍動的な主題を軸に運ばれる力強い終曲。伴奏付きのカデンツァの後、テンポを速めて終結する。

（柴田克彦 音楽ライター）

作曲：1850年／初演：1860年6月9日、ライブツィヒ／演奏時間：約25分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、交響曲のジャンルに新しい姿をもたらした、音楽史上におけるエポックメイキングな作品。

1792年、ドイツのボンからウィーンに出たベートーヴェンは、94年にピアノ三重奏曲とピアノ・ソナタ、95年にピアノ協奏曲、96年にチェロ・ソナタ、98年にヴァイオリン・ソナタの最初の本格作を発表し、30歳を迎える1800年に交響曲第1番と最初の弦楽四重奏曲集、02年に交響曲第2番を完成した。

一方で、耳の病も発覚し、02年10月には有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれる。二人の弟に宛てたこの文書は、難聴の苦悩と自殺を考えたことを告白しながら、芸術家として新たに生きる決意を宣言した内容。前記の段階を踏んだ積み重ねによる技法的な成熟と、こうした苦悩の克服が相まった03年頃から、ベートーヴェンの作風は、先達の影響を完全に脱して、“英雄的様式”と呼ばれる雄大な方向に進化していく。その最初の代表例が交響曲第3番である。

本作は、交響曲第2番完成から間もない1803～04年に作曲され、04年12月、曲を献呈されたロプコヴィッツ侯爵邸で非公開初演の後、05年4月にアン・デア・ウィーン劇場で公開初演された。

この曲は、「ベートーヴェンは、貧しい階層から出て王制に戦いを挑んだナポレオンへの共感をもって作曲したが、04年彼が皇帝に即位したのを聞いて激高。『あの男も権力を得たいだけの俗物だった』と叫んで、スコアに記した献辞を激しく掻き消し、新たに『ある英雄の思い出に捧げる』と書いた」との逸話で知られ、実際の消し跡も存在している。ただし、どこまでナポレオンを意識して作られているのか定かではない。自らイタリア語で「シンフォニア・エロイカ＝英雄交響曲」と記しているだけに、“英雄的”な要素が盛り込まれているのは確実だが、もっと象徴的に捉える見方もある。

いずれにせよ本作は、ベートーヴェンの新境地へ挑む強い意志が、作曲技法の進化と融合した、類い稀^{まれ}な意欲作である。最大の特徴は、従来の交響曲とは一線を画した長大さと巨大さ。さらには、第1楽章＝主和音2連打の大胆な開始と推進力に溢れた展開、第2楽章＝交響曲には稀な葬送行進曲の採用、第3楽章＝ホル

5/24
名曲5/26
みなとみらい

5/24
名曲

5/26
みなとみらい

ン3本（通常は2または4の偶数で用いられるため3本の作品は非常に少ない）の効果的活用、第4楽章＝雪崩^{なだれ}のような出だし、交響曲のフィナーレでは珍しい変奏曲の採用、フーガによる展開……と各楽章に画期的要素が満載されている。そしてこれが従来の交響曲とほとんど変わらない編成——基本的にホルンを1本多く加えただけ——で書かれているのは、まさに驚異的といえるだろう。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ。決然たる出だしの直後にチェロで奏される第1主題が全体を支配する。第2主題はオーボエ（同楽器は曲全体で活躍する）に始まる柔らかな旋律。シンコペーションのリズムを伴った、推進力みなぎる音楽が展開され、輝かしいクライマックスが築かれる。

第2楽章 「葬送行進曲」、アダージョ・アッサイ。ハ短調の悲痛な主題を中心に荘重な歩みを続け、ハ長調の中間部はやや明るめのトーンに変化。力強いフーガの後、悲しみが戻る。

第3楽章 スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ。明るく活気ある音楽への一変が目覚ましい効果を発揮する。主部はスタッカートで始まり、徐々に力を増していく。トリオはやや穏やかで、3本のホルンの響きが印象深い。

第4楽章 フィナーレ、アレグロ・モルト。自由な変奏曲。主題はバレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉終曲から採られており、最初に低音の伴奏声部、次いで旋律が変奏されるという凝った作りがなされている。フーガによる展開を経て、いったん穏やかになった後、堂々と結ばれる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1803～04年／初演：1805年4月7日（公開初演）、ウィーン／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部